

現況分析における顕著な変化に
ついての説明書

教 育

平成22年6月

高知大学

目 次

7. 医学部	1
9. 農学部	4
1 2. 総合人間自然科学研究科	6

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 高知大学

学部・研究科等名

医学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目 I 教育の実施体制

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 基本的組織の編成

医学部学生の学外臨床実習の充実・向上を図るため、臨床研修施設を1施設から8施設に増やすとともに、新たに94名の臨床教授、67名の臨床准教授、108名の臨床講師の称号を付して、関連施設を含めた学生の指導体制を整備し、教育の実施体制の強化を行った(資料7-1)。

○顕著な変化のあった観点名 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

「チーム基盤型学習法 (Team-Based Learning; TBL)」の臨床教育への本格的な導入に向けて、1年生及び2年生に準備段階の導入を行っている。また、学内ワークショップの開催に加え、第41回日本医学教育学会大会や四国地区大学間連携事業のフォーラムでもTBLに関するワークショップを担当するなど、積極的な取り組みを行っている。

さらに、平成21年6月には、本学教員監修のもと「TBL-医療人を育てるチーム基盤型学習-成果を上げるグループ学習の活用法>」の日本語版を出版した。本書は、日本医学教育学会でも紹介され、TBLが医学生のみならず、広く医療関係の学生のための極めて効率の良い教育技法として取り入れられることが大いに期待されている。

また、高知大学医学部と医学部学生の学外臨床実習に協力する関連教育病院との間に新たに設置した「医学部関連教育病院運営協議会」において、臨床実習の学生数、実習期間、実習内容及び方法等について協議し、施設の規模や特徴を生かした学外実習を開始し、学生の多様なニーズに応えている(資料7-2)。さらに、関連教育病院との相互協力により学生の臨床実習の状況を把握するとともに、総合的に学生の成績評価を行うこととした。

資料7-1 平成21年度 学外臨床研修施設及び受入状況 (H21.8.31~H22.1.15)

施設名	所在地	受入学生数 (延べ数)
高知県・高知市病院企業国立高知医療センター	高知市	65
独立行政法人国立病院機構高知病院	高知市	15
高知県立安芸病院	安芸市	2
高知県立幡多けんみん病院	宿毛市	47
高知赤十字病院	高知市	57
医療法人近森会近森病院	高知市	85
特定医療法人仁生会細木病院	高知市	9
高知医療生活協同組合高知生協病院	高知市	14
合計		294

資料7-2 高知大学医学部関連教育病院運営協議会構成

高知大学	医学部長, 医学部附属病院長, 学務委員長, 医学教育・推進室長, 医学部長が指名する医学部教授 (3名以上)
関連教育病院	病院長, 臨床実習指導責任者, 事務担当責任者

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育)研究

法人名 高知大学

学部・研究科等名 医学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目V 進路・就職の状況

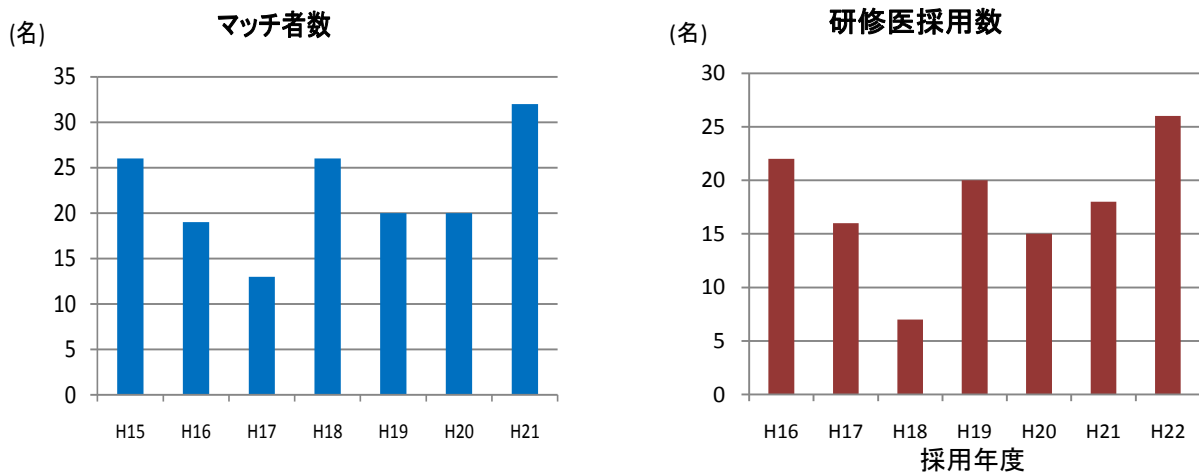
2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 卒業（修了）後の進路の状況

平成 21 年度医師臨床研修マッチング（平成 22 年度採用予定）では、本附属病院の研修プログラムに 32 名（うち本学出身者は 30 名）がマッチした。この数は平成 16 年度の制度開始以来の最大数であり、前年度の 1.6 倍にあたる。さらにマッチング終了後に 1 名が研修仮契約を済ませ、33 名の研修予定者となった。最終的には医師国家試験不合格等の事情により、26 名が本附属病院研修プログラムで研修を開始した（資料 7-3）。

今回、研修マッチングの結果が向上した要因としては、① 研修制度の柔軟化に迅速に対応し研修医のニーズにあったプログラムを提供し、広報したこと、② 研修センターや指導医の努力により研修環境が改善されたことが認識されてきたと考えられること、③ 新卒学年の中で、高知県での研修の機運が高まっていたこと、などが考えられる。

資料 7-3 臨床研修マッチング数及び研修医採用数（平成 22 年 3 月現在）



○顕著な変化のあった観点名 関係者からの評価

本学の研修医のうち、本学医学科卒業生に対するコメディカル（看護師）の評価（50 点満点）は、他大学出身者よりも高い（本学出身者 33.6 点，他大学出身 30.8 点）。さらに平成 19 年度採用の本学出身者よりも平成 20 年度採用の本学出身者は、34.0 点と評価が向上している。母数が多くないため統計学的有意差は得られないが、本学における態度・習慣領域の教育効果が重要な要素と考えられる観点であり、今後も継続して努力していく必要がある。

現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育/研究)

法人名 高知大学

学部・研究科等名 医学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例2 「地域ニーズに呼応した医療従事者の育成」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

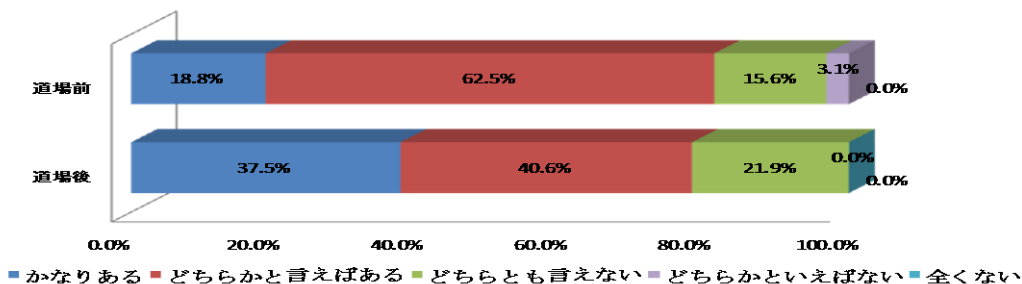
本学の家庭医療学講座が主催する課外活動の「家庭医道場」は、「地域に赴き、地域の人々と接し、地域を知る」をコンセプトに学生実行委員による企画を取り入れながら、これまで計6回、県内3町村で開催し、延べ191名（医学科生148名、看護学科生38名、他大学生5名）が参加している（資料7-4）。この取組は、地域住民はもとより、各自治体、地域の医療機関や医療団体などに協力いただき、座談会やフィールドワークを取り入れながら、地域医療の現場において、家庭医療を実践している医師・コメディカルスタッフとも交流し、家庭医の重要性を理解するとともに、学生の基本的な診療技能、コミュニケーション能力の向上を目指している。これまで参加学生を対象として実施したアンケート調査では、「将来、地域で医師または看護師・保健師として勤務する可能性は？」の質問に対し、「かなりある」と答えた割合が道場前から道場後には約50%上昇することが確認できた（資料7-5）。さらに、参加学生と地域の方々によるアンケート調査（自由意見）からは、「医療従事者と住民との繋がり・信頼、住民同士の繋がりの深さを感じた」、「大学のカリキュラムの一環にしてもいいのではないか」、「地域医療には（地元の）私達の協力も必要と感じた」や「色々な問題がある現場の声をこうした取組みから聞いてもらいたい」など積極的な意見や要望が多く聞かれ、今後も地域医療の現場や地域住民とのコミュニケーションを図りながら、地域ケアに携わる医療者としての資質のさらなる向上を目指していく。

資料7-4 家庭医道場実施状況（出典：高知大学医学部家庭医療学HP）



資料7-5 家庭医道場実施前と終了後の意識変化（出典：家庭医道場2008in馬路村報告書より）

Q. あなた自身が、将来、地域で医師または看護師・保健師として働く可能性はあるでしょうか？



現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 高知大学

学部・研究科等名 農学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目 I 教育の実施体制

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(1) 平成 20 年度には、共通教育初年次科目「大学基礎論」・「課題探求実践セミナー」等グループワーク授業担当教員対象のワークショップに参加し、授業展開やグループワークの活性化に関する FD を実施した。

また、平成 21 年度は「課題探求実践セミナー」等の初年次科目を開設して 2 年を経過したことから、これまでの実践経験をもとに、実施内容や方法、問題点などについて意見交換を行う FD セミナーに参加するなど、今後の教育内容・方法の充実に向けた取組みを行った。

(2) 平成 21 年 4 月に大手予備校の河合塾から農学部における初年次教育への取組みに関する訪問ヒアリングを受け、その結果、5 つの評価項目全てにおいて a 評価の「非常に進んでいる」という高い評価を得た(調査対象: 32 大学 35 学部)(資料 9-1)。

また、平成 21 年 12 月 25 日に河合塾主催シンポジウムにおいて、学務委員長が「高知大学農学部における初年次教育への取組み」と題した事例発表を行い、本学部における共通教育初年次科目ならびにフィールドサイエンス実習の実施について紹介した。

これらの調査結果や発表内容は、平成 22 年 2 月 15 日付日本経済新聞、友野伸一郎著「対決! 大学の教育力」(朝日新書, 2010)、河合塾編「初年次教育でなぜ学生が成長するのか」(東信堂, 2010) で紹介され、本学部においては、裏付けを持って PDCA サイクルを回していると評価された。

資料 9-1 河合塾の初年次教育調査による高知大学農学部の評価

(出典: 河合塾 H21 年 4 月実施)

評点	評価の視点	
a 非常に進んでいる	A-1	PBL(Problem/Project Based Learning) で問題発見・解決型の取組みがどの程度導入されているか
a 非常に進んでいる	A-2	初年次ゼミにおいてグループワークが、どの程度、どのように導入されているか
a 非常に進んでいる	A-3	初年次ゼミ以外で命題知から実践知・活用知への転換を促進する取組が、どのように、どの程度あるか
a 非常に進んでいる	B	「学生の自律・自立化」を促す取組みを行っているか
a 非常に進んでいる	C	すべての学生に一定水準以上の初年次教育を保証しているか

※初年次ゼミが全員必修もしくは、事実上90%以上の学生が履修し、必修と同等となっていることを前提条件。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育)研究

法人名 高知大学

学部・研究科等名 農学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目Ⅲ 教育方法

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 授業形態の組合せと学習指導方法の工夫

平成21年度「21世紀東アジア青少年大交流計画（JENESYS アセアン）」に基づくアセアン及び東アジア諸国等を対象とした学生交流支援事業に採択され、東南アジア地域の環境・食料問題の解決に向けて四国・高知の温暖な気候や自然環境を活用し、フィールドサイエンスに特化した教育・研究のプログラムを展開した。

学修指導方法の工夫として、日本人学生には、国や文化の違いに基づく考え方の違いを理解するために、留学生と1つのテーマで討論させた。留学生に対しては、日本人学生のような卒論研究や学生実験をする機会に恵まれていないことから、日本人教員の研究室に配属させて短期間の研究や実験を行わせるとともに、成果の発表方法を学ばせる目的で公開研究発表会を実施した。

また、このプログラムにより来日した留学生と農学部国際支援学コースの日本人学生を共に学ばせることにより、双方の学生に国際感覚を身に付けさせるとともに、英語力の向上を図った。数量的な検証は行っていないが、プログラムに参加した学生間の交流は続いており、英会話に抵抗がなくなっていることや英語でのコミュニケーションに自信が付き、実習などで海外に積極的に出かける学生が増えたことなど、着実に成果が表れている。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 高知大学

学部・研究科等名 総合人間自然科学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目 I 教育の実施体制

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 基本的組織の編成

平成 20 年度に、国立大学法人では初めて一元化された文理統合型の大学院総合人間自然科学研究科を設置し、「人間」と「自然」、それに両者の相互的な影響関係や過程の場における問題群を「総合」的かつ「科学」的に捉え、高度な専門性・学際性を有する教育研究を充実・発展させるため、教員の所属を「教育研究部」として改編し、横断的な研究の促進など研究活動の活性化を図り効果的に実行できるよう、従来の研究科体制の枠を超えた新たな組織的で実質的な大学院教育を提供している(資料 12-1)。

医科学専攻(修士課程)では、平成 20 年度からがんプロフェッショナル養成プランで選定された「中国・四国広域がんプロフェッショナル養成プログラムチーム医療を担うがん専門医療人の育成」に伴い、「がん専門薬剤師コース」と「医学物理士コース」を新たに設置した。また、医学専攻(博士課程)では、黒潮圏総合科学専攻と応用自然科学専攻との緊密な連携のもとに、両専攻における自然科学と人間科学のパラダイムをも取り入れた教育研究体制を構築し、地域特性に根差した医学・医療の推進、国際的に通用する優れた医学研究者、リサーチマインドを持つ優れた臨床専門医を養成するため、従来の生命科学系、神経科学系、社会医学系の 3 専攻を「生命科学コース」及び「医療学コース」の 2 コースに変更した。

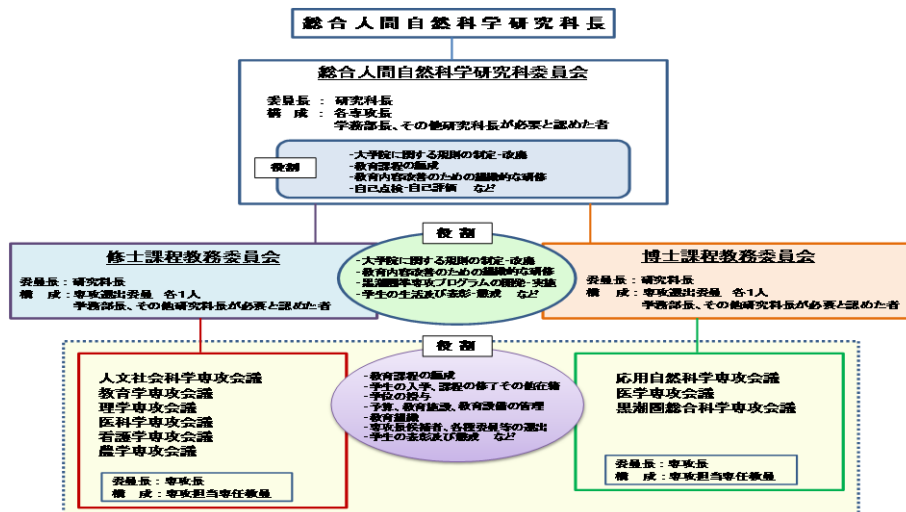
資料12-1 教員研究部所属学系・部門における大学院担当教員数 (H21. 3 現在)

課程・専攻名	人文社会科学系		自然科学系		医療学系	総合科学系
	人文社会科学部門	教育学部門	理学部門	農学部門	医学部門	黒潮圏総合科学部門
修士	人文社会科学	78	1			3
	教育学		68			
	理学			86		6
	医科学				52	1
	看護学				26	
博士	農学			51		8
	応用自然科学			40		1
	医学				202	
黒潮圏総合科学	4	2	3			18

○顕著な変化のあった観点名 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

改組した総合人間自然科学研究科において、「総合人間自然科学研究科委員会」の下、「専攻会議」や新たに「修士課程教務委員会」、「博士課程教務委員会」を整備し、教育内容、教育方法の改善に向けて取り組んでいる(資料 7)。

資料 12-2 高知大学総合人間自然科学研究科組織体制



現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 高知大学

学部・研究科等名 総合人間自然科学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

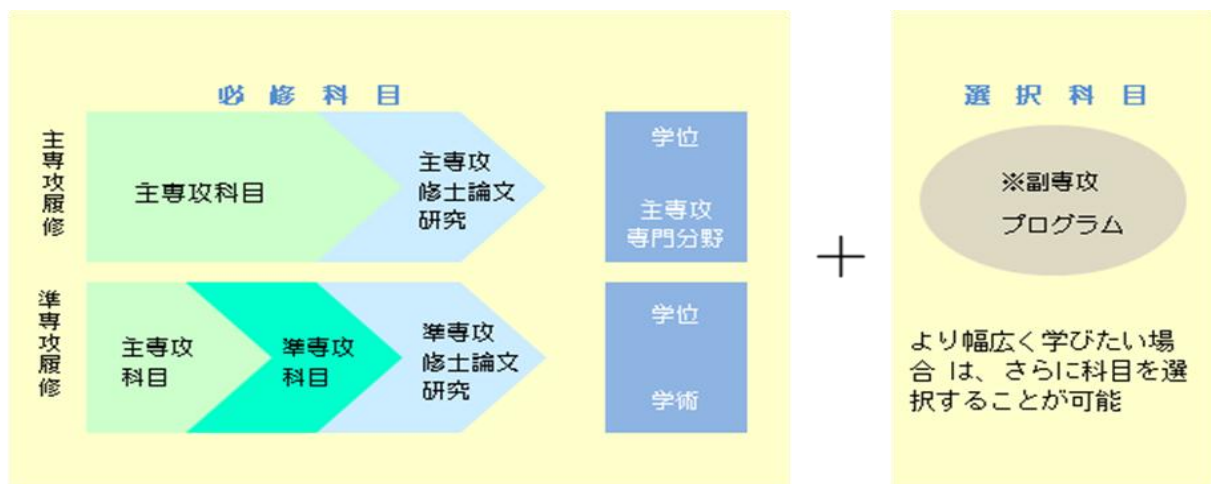
分析項目名 分析項目Ⅱ 教育内容

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 教育課程の編成

総合人間自然科学研究科の特徴として、専門性を深化させつつ、領域横断的視点をも獲得する「主専攻履修」、文理融合科目に取り組み、新領域を切り拓くための「準専攻履修」、目的に応じて、学際的素養をプラスできる「副専攻プログラム」がある。「主専攻履修」は、本研究科の修士課程を構成する6つの学問分野を弾力的・機動的なネットワークで繋ぎ、高度な領域横断的学びを可能にすることで、専門分野の学際的深化と同時に多様な視点の獲得を図っている。また、「準専攻履修」は、基礎となる専門分野に軸足を置きつつ、黒潮圏総合科学分野や各専攻が提供する開放科目などの文理融合科目に取り組むことで、地球環境問題や持続型社会の実現に貢献する新学問領域を創設している。さらに、「副専攻プログラム」は、基礎となる専門分野の習得に加え、学生個々の目的に応じた近接分野・異分野の知識獲得により、オンリーワンの研究やキャリア形成に繋げるという、本学独自のものである(資料12-3)。

資料12-3 総合人間自然科学研究科修士課程の履修システム



※副専攻プログラムについて

特定のねらいのもとに用意されたレディーメイド副専攻プログラムと、個々の目的に応じて構成し認定を受けるオーダーメイド副専攻プログラムがある。

博士課程では、各専攻における専門性を深める一方で、他分野知識の習得を目的として共通科目(DCセミナー)を開設し近接分野の履修を可能にしている。DCセミナー(必須2単位科目)は、3年生の1学期までに専門研究者・教育者の講演を10講演以上(文系の学生は内3講演を理系、理系の学生は内3講演を文系)聴講することを定めている。

なお、DCセミナーの講演は、各キャンパスの専攻で開催する部局間合同研究発表会ほか、学外の研究会・学会等についてもDCセミナーとして指定をした場合は単位の認定を行っている。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育)研究

法人名 高知大学

学部・研究科等名 総合人間自然科学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目Ⅲ 教育方法

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

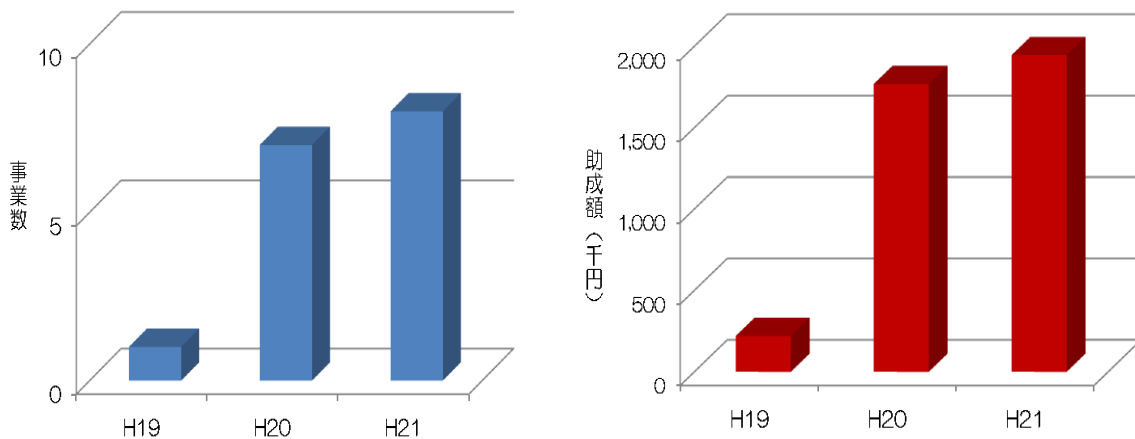
○顕著な変化のあった観点名 主体的な学習を促す取組

「高知大学国際交流基金」の助成事業である「大学院生の研究発表を目的とする海外派遣事業」などを積極的に活用し、優れた大学院生を広く海外へ派遣して、シンポジウムや学会等への参加、調査研究発表を行う機会を提供することにより、国際的な人材育成を目指している（資料12-4）。

各事業に参加した学生には、世界レベルの研究者や研究内容に触れることや外国語習得の必要性などの刺激となり、主体的な学習意欲の向上に大きく影響している。

事業後は、報告を義務付けるとともに、成果報告書等を学内グループウェア上で公表するなど、検証を行っている。

資料12-4 大学院生の海外派遣事業実績（平成22年3月現）



現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 高知大学

学部・研究科等名 総合人間自然科学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目名 分析項目IV 学業の成果

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 学生が身に付けた学力や資質・能力

平成 20 及び 21 年度には、本学院生が以下の学会等で賞を獲得するなど、大きな研究成果を挙げている(資料 12-5)。

中でも「第 10 回国際カイアシ類会議」での本学院生の研究発表「群体ホヤ *Aplidium yamazii* (シモフリボヤ) に共生するハルパクチクス目カイアシ類 *Idomene* sp. の生活史と宿主特異性」は、高い評価を得、最優秀学生口頭発表として表彰された。従来、底生性群体ホヤにカイアシ類が共生していることは知られておらず、この点において世界で初の知見であり、群体ホヤとカイアシ類の共進化ならびにカイアシ類の系統進化の解明に新たな展望をもたらした。本発表内容を基に学位論文も完成させ、カイアシ類がシモフリボヤの共同排出腔内で産卵し、孵化後も成熟するまでその場に留まることが明らかとなり、密度効果により産卵数が調節されている可能性がきわめて高いことが統計学的手法を駆使することで明らかとなった。カイアシ類の個体群に関し、顕著な密度効果の研究例はこれまでにない。*Idomene* はきわめて稀な分類群で、世界でこれまで数例の報告しかなく、西部太平洋では未記録の属である。また、過去のいずれの記載も十分ではなく、分類学的問題を含んでいた。シモフリボヤから得られたカイアシ類を既往の文献ならびに模式種である *Idomene purprocincta* のホロタイプと比較した結果、未記載種であることが確実となり、近々に新種として公表される予定である。以上のように、系統進化学、個体群生態学、分類学のそれぞれの分野の発展に大きく貢献した。

資料 12-5 平成 20, 21 年度大学院生の学会賞等受賞一覧(平成 22 年 3 月現在)

学会名等	名称の名称	受賞者数
日本細菌学会	優秀ポスター賞	1名
日本臨床検査医学会	優秀演題賞	1名
国際カイアシ類会議	最優秀学生口頭発表賞	1名
	最優秀学生ポスター賞	1名
日本地質学会四国支部	優秀ポスター賞	1名
日本化学会中国四国支部	日本化学会中国四国支部支部長賞	2名
高知化学会	高知化学会会長賞	2名
日本科学協会	笹川科学研究奨励賞	1名
ヤンマー	学生懸賞論文優秀賞	1名
高知大学	大学院生研究奨励賞	4名
オーストラリア	エンデバー研究フェロースhip	1名